

私は、中学二年生のとき職業体験で特別養護老人ホームを訪れ、そこで過ごす認知症を抱える人々と触れ合いました。職業体験以前は、どんな口調や会話をすればよいのだろうかと不安でしたが、実際に関わってみると多くの気づきや学びを得ることができました。

始めに感じたのは、「頭では忘れていても体は覚えている」ということです。認知症だから、何もかも覚えていない訳ではなく、体は動きや音を覚えているのです。あるおばあさんは、昔から編み物が好きだったようですが

「編み物はもう忘れてできないだろう」

と言っていました。しかし、いざやってみると、手は編み物を覚えていて、すらすらと編み物が進んでいき、あっという間にコースターが完成しました。その後、おばあさんは私にコースターを渡してくれました。とてもうれしくてそのコースターは今でも大切に使っています。自分の得意なことや好きなことを通じて人を笑顔にできることは、認知症の方でもそうではない方も同じで、素晴らしいことだと思います。

次に感じたのは、認知症の方も私たちと同じように「喜び」「不安」「感謝」といった気持ちをもっているということです。記憶が曖昧になっても、優しい言葉や交流によって表情が和らいだり、笑顔になったりする姿を目の当たりにしました。その姿から人間関係で大切なことは、いま目の前にいる人に何をしてあげられるのかを考えることだと気づきました。

この職業体験を通して、私は「思いやりの心」を行動で示すことの大切さを学びました。言葉に頼ることなく、笑顔やしぐさ・声のトーンなど相手に安心を感じてもらえる方法は

たくさんあります。また、認知症の方との関わりは特別なことは何もなく、誰に対しても必要な思いやりの姿勢であることに気づきました。

職業体験の最後に、おじいさんやおばあさん方が私に手を振って

「また来てね」

と言ってくださったとき、私は

「はい」

と答えながら、この体験を忘れずにいようと思いました。